

## 大谷東平先生を偲ぶ

斎 藤 将 一

お元気な声で「おれは不死身だよ」と言いながら大谷東平先生は、まだ、世田谷に住んでおられるような気がしてならない。しかし、先生は昭和52年5月5日朝71歳の生涯を閉じられて、もう半年以上もたっている。

先生は、明治38年12月29日東京小石川で生れ、昭和3年東京帝国大学理学部物理学科卒業と同時に気象庁の前身である中央気象台に入られ、38年の長きにわたり気象界にあって、気象学と気象事業に大きく貢献された方である。中央気象台においては主として天気予報業務にたずさわリ、近代気象事業のうち特に予報業務の草分けに尽力されると共に、卓越した学識と積極的な指導力をもって部下の指導育成に努められた。昭和17年中央気象台予報課長となり、昭和18年11月から翌年2月にかけて現職の予報課長のまま南方ラポール基地に進出し、熱帯気象の特別観測調査を指導し、熱帯気象予報技術開発に貢献された。その後、中央気象台の業務部長と予報部長を歴任され、昭和20年7月満州国中央観象台長となり渡満されたが、現地で終戦となり幾多の艱難辛苦を乗り越えて帰国し、昭和21年10月大阪管区気象台長となられた。この大阪在勤は昭和38年3月気象大学校長となられるまでの16年半も続き、この間、数多くの業績を残されている。その後、昭和39年4月気象研究所長となり、昭和41年3月31日気象庁を退官された。

次に、大阪管区台長時代の先生の主な業績について述べてみよう。まず、昭和23年9月近畿地方の気象災害の軽減防止のため関係官公庁および民間の会社団体を対象とした官民一体の組織である近畿防災気象連絡会（官公庁30、民間70）を創設された。同会の事業は異常気象に関する注意報、警報、情報等を大阪管区気象台から直接会員に電話速報を行ない、官民一体の防災活動に資すると共に毎月1回定期的に会員を気象台に招集して気象懇話会を開催するほか、機関誌も定期的に発行配布して、日頃から会員の防災気象知識の啓蒙を図ったのである。昭和36年9月第2室戸台風が大阪を直撃した際、同連絡会の事前の通報に基づく官民一体の防災活動により、大阪港における船舶の損害皆無、また、高潮による死者零という驚くべき成果が挙げられている。この実績は、大阪



大阪管区気象台長当時の  
大谷東平先生

市により高く評価され、昭和36年11月3日大阪市長から先生に対し大阪市民文化章が贈られた。

次に、先生は昭和26年に民生協力を目的に関西気象協会を創立されたが、これは現在日本気象協会関西本部として活動が続けている。また、現在、台風予報、集中豪雨予報および短時間予報に大きな威力を発揮している気象レーダを現業用として使用する口火をきられたのも先生であった。その現業用第1号機が昭和29年大阪に設置されたが、これは昭和28年の近畿2大水害を反省し、集中豪雨予報には是非とも気象レーダの必要なことを先生が近畿地方災害対策協議会で力説し、政府への建議書となって実現したものである。

もう一つ忘れてならないことは、先生が京都大学の滑川教授と神戸海洋の松平台長と協力して、京大と気象台との結びつきによる関西の気象研究活動の基礎を築かれたことである。すなわち、先生の努力によって昭和25年5月京阪神雑誌会という研究会がつくられ、これが昭和

28年12月から日本気象学会関西支部として正式に発足し、その後関西の気象研究は活発となり今日に至っている。

以上が先生の業務上の主な業績であるが、学術研究の面においても先生は次に述べるように先駆的な研究をなされている。

まず、止風線と集風線の研究であるが、この止風線とは先生の命名によるもので、北東貿易風が赤道無風帯に侵入するときに発達し、赤道無風帯の中にかなり幅狭い地帯にわたって強いスコール、大雨、局地性強雷雨等の熱帯悪天候をつくるものである。先生はこの止風線の位置決定法と予報法を提示して、熱帯積乱雲群の予想法を開拓された。

集風線も先生の命名によるものであるが、これは気流が細長い地帯にわたって移流しながら上昇する、その気流帯に名付けられたものである。先生は、本邦における大雨時において 530 mmHg 等圧面図上に現われる湿舌は南から北に向かう集風線により熱帯気団が移流上昇しながら北上することによって発生することを示し、本邦の大雨は集風線と密接に関係していることを明らかにされている。この集風線の研究は、ビヤクネスの前線説が提出されて以来忘れ去られていた移流上昇の概念を体系付けたものとして、大きな意義を持っていると言っても過言ではあるまい。

次に、上層気流による指向の原理がまだ確立されていなかった昭和の初期において、先生がはじめて上層気流による台風進路予想法を開拓されたことは画期的なことと言えるであろう。高橋浩一郎著の「天気予報」(海洋出版イルカぶっくす)には次のように書かれてある。「天気予報を出す際の一つの重要な指導原理にスティアリングがある。室戸台風のあと、1935年大谷東平は上層気流によって台風が流されることを発表している。」

もう一つの重要な研究として台風域内のうねりがある。先生は6箇の台風域内で行なわれた1193箇の船舶観測資料を入念に解析され、台風の中心より1000km以内の海面は常に風向と同じか、これよりやや右方に向かううねりがあり、特定の台風においてのみ、このほかに放射状のうねりも存在することを明らかにされ、また恐るべき三角波は台風中心に発生するものではなく、中心通過直後において風浪とうねりの干渉によって生じるものであって中心の右側後面の75km以内に見られるものであることも明らかにされている。後年、宇野木早苗さんが、台風の移動速度、発達および衰弱等を考慮して台風

域内の波浪とうねりについての研究を完成されたが、その研究に先生の研究が大きな刺激となったことを思うとき、海の波にまで先駆的研究をなされた先生に対し大きな感動を覚える。

以上のほか、先生の研究の中には、「北西風により表日本に形成される気圧の窪み」、「東支那海南部に独立して発生する低気圧」、「貧乏風と呼ばれるおろし」などがある。はじめの気圧の窪みは関東地方の天気予報上問題の多いものであるが、この発生原因の一つとしてフェーンによる気圧降下があることを明らかにされたものである。中間のものは、いわゆる台湾坊主といわれている低気圧には発達するものと発達しないものがあり、発達するものは南方からはっきりした mT 気塊の侵入する場合であることを明らかにしたものである。最後のものは、岡山県の広戸風、愛媛県のやまじ、滋賀県の比良八荒、奈良県の平野風、兵庫県内の六甲おろしなど、数 km 以内の狭い区域に限って吹きつり大きな風害を起こす狂風を統一的に解明されたもので、このおろしの特徴と気象学および地理的条件を明示されている。このおろしの研究は最近盛んになった局地風の研究の先駆的なものである。以上が先生の主な学術研究であるが、今考えてみると、先生は先見の明と果敢な実行力を兼ね備えられた方であって、気象学と防災気象活動の先駆者であり、指導者であったとつくづく思う次第である。

さて、最後になったが、台風と戦った先生の言葉を思い起こしてみよう。

「この予報がはずれたら、2人とも頭を丸めようや。」

この言葉は、昭和29年9月ジェーン台風が大阪を直撃したあと、大阪でその災害復旧が始まったばかりなのに引き続いてキジア台風が現われ、これが本州の南方洋上を北西進していたときのものである。台風の転向点が間近かに迫っており、上陸地点が関東になるか、関西になるか、はたまた九州になるか予断の難しい状況であった。上層等圧面の高度変化図や銚子の毎時気圧変化を入念に解析して、われわれは太平洋高気圧の優勢を確認し、転向点は西寄りの公算が大きいと判断し、キジアは九州行きと予想した。この結果、キジアは大阪に来ないという予報になったのである。台風の予想進路の幅を広くすることは災害復旧に大わらわの最中のお阪市民をいたずらに心配させることになるし、九州行きの予想に相当の自信があったので思い切った上記の予報になったのである。そして、この予報が地元紙の号外にまで出てしまったとき、前述の先生の言葉が出たのである。幸いに

もキジアは予想どおり九州に上陸し、これを縦断して日本海に抜けた。

「大阪管区気象台長大谷東平が申し上げます。大阪は最悪の事態になります。」

これは第2室戸台風と戦った先生の言葉である。昭和36年9月16日午前9時30分大阪府に対する暴風雨・高潮警報発表とまったく同時に先生の命により私が代行して、この言葉を、大阪府知事、大阪市長、大阪府警察本部長、NHK 中央放送局長あてに電話で緊急連絡をしたのである。前日から近畿地方に来襲する公算の大なることを台風情報で流し、当日の午前7時には大阪府に対し暴風雨警報・高潮注意報を出し、そして、午前9時30分

に暴風雨・高潮警報と次第に大阪直撃の公算の大きいことを知らせたのであるが、最後に先生は大きな自信をもって防災機関の最高責任者に直接はっきりした警告を出されたのである。

この先生の警告は、昭和52年発行された日本放送協会編「放送50年史」の中で次のように生きている。午前9時30分、大阪管区気象台は台長大谷東平の名で知事、市長、大阪府警察本部長、NHK 中央放送局と地元の民放新聞に対し「最悪の事態となった」ので厳重な警戒と予防態勢をとるよう要望した。

(日本気象協会中央本部)



山崎 道夫編

## 佐賀の天気

佐賀新聞社発行1977、B 6 版、172頁、980円。

本書は、佐賀地方の気象の特徴を季節の順にわかりやすく解説したものである。著者グループは、地域防災の第一線にある佐賀地方気象台の、山崎道夫（前台長）、服部徳一（前技術課長）、倉田健男（防災業務課長）、糸山真一（予報官）、吉村寿一（防災業務課調査官）および井上辰雄（防災気象官）の諸氏から成っている。県民の方々にふだんから気象に親しみ、郷土の気象の特徴を理解してもらいたいとの意向のもとに、著者らが佐賀新聞に1年間連載したものをまとめたのがこの本となった。このようないきさつからもわかるように、本書のねらいは、県民の気象に対する関心と理解を高め、ひいては地域防災活動の向上に資するという点にある。

内容は、春・夏・秋・冬の季節にしたがって身近かに起こる事象を題材にして生活と気象とのかかわり合いを説明しながら、豊富な経験と適切な事例、および図や表を用いて天気の特徴や地域の気象特性を理解させるよう努めている。とくに、集中豪雨・台風・高潮・干ばつな

ど災害をもたらす現象については、その態様やメカニズムにも触れている。

また、内容は、単に県内の気象特性だけにとどまらず、米作、海難、漁業など農林水産業と気象の関係にも及び、さらに、地域（農業）に合った気象の利用の仕方にもふれている。

さきにも述べたように、本書は県民一般を対象にしているため、高度な専門的な叙述はなされていない。むしろ、平易にわかりやすく、ときには俳句など引用して親しみやすく、各節の題材は独立していてどこからでも読み出せるという気楽さがある。しかも、その内容は、あくまでもしっかりした観測統計値や過去の災害経験および、豊かな防災知識に裏打ちされたものであるという点に本書の特色があるように思う。このことは、巻末に気象資料として、佐賀・県内各地の気象表、極値表、風水害年表、季節ごみや毎日の天気の出現率（佐賀）などを付して利用者の便を図ってあることから行き届いた心くばりが察せられる。

本書のように、地域に密着した一般への啓蒙書が出たことは喜ばしい。これを防災気象のいわば教養書として、今後さらに専門的な解説書が続くことを期待したい。「佐賀の天気」は、ただ単に佐賀県だけでなく、広く他の地方の方々にもいろいろな意味で役に立つであろう。また、現代社会が持っている防災気象上の問題点を示唆する意味で気象専門の人にも益するところが多いと思う。

(植村八郎)